

「沈香屑 —— 第二炉香」と「女家族」における 母娘関係の比較

顧 蕾

1. はじめに

張愛玲（1920—1995）と林芙美子（1903—1951）はそれぞれ中国と日本の女性作家である。人生経験と家庭環境が違う二人はそれぞれの女性観を持っている。本稿では二篇の作品の分析を通じて、二人の作家の母娘関係に関する考えの一角をとりあげ比較したい。扱う作品は張愛玲の「沈香屑 —— 第二炉香」¹と林芙美子の「女家族」²である。

この二つの小説の共通点は登場する家族全員が女性であり、また、結婚をめぐって物語が展開するところにある。近代女性文学では、女性の成長物語が中心的テーマとなっているものが多い。それは主に親との対立と葛藤、また他者との関係、男性との恋愛における対立と葛藤に分けられる。³ 女性の家庭における立場の変化をもたらす結婚は、多くの女性作家によって女性の成長における不可欠な一部分として描かれる。本稿で扱う二つの作品は結婚によって水面に浮上した母娘の葛藤を描いている。「沈香屑 —— 第二炉香」は男性がいかに女性を追いかけ、苦しむかを描いているのに対して、「女家族」は逆に女性がいかに男性を追いかけ、苦しむかを語っている。前者の場合、男女関係についての女性の無知とそれがゆえに生じた残酷さ、男性の強烈な愛とそれが原因で滅びていく絶望感、社会世論の恐ろしさを強調する。後者は女性が男性を追いかけることを女性の天性だと判断し、女性同士の憎しみとそこから生じる家庭の崩壊は必然のものだと強調している。その結果、「沈香屑 —— 第二炉香」は結婚の崩壊、男性の死亡と女性の成長の停滞を描き、「女家族」は結婚の成立と女性の成長を描く。しかしいずれにせよ、作品の中に登場する母親と娘たちの関係が、物語の発展と結果を決定づける要因となっていることは見逃せないだろう。

全ての男性が消えて、女の楽園となったはずの家で生活を共にしている母娘の関係について、張愛玲と林芙美子はともに悲観的な見方を取り、母娘が真の

一心同体になることの不可能性を強調している。本稿は二篇の作品が扱う母娘関係を分析し、その関係の共通点と差異性を見出すことによって、張愛玲と林芙美子の女性観の一部分を比較する。

2. 物語の粗筋と人物の設定

「沈香屑 —— 第二炉香」の主人公は香港のイギリス人で、この物語を語り手の「私」(香港の大学に通っている中国の女性)に教えてくれたクレメンティ(克荔門婷)も西洋人の女の子である。そして「私」は男性主人公であるロジャー・アルバート(羅杰・安白登)を見つめる形で物語を発展させる。

物語は40歳の大学教授ロジャー・アルバートが結婚する日から始まる。彼はスージー・ミッチェル(禳細・蜜秋児)と結婚するが、スージーは性に関しては完全に無知なので、初夜に逃げ出して夫を性異常者だと周りに訴える。昔、スージーの姉ミリセント(靡麗笙)も同じ理由で夫と離婚した。まわりの誤解と悪意によって、名誉と職場を失ったロジャーはミリセントの夫が自殺したことを知り、自殺する。スージーは家に戻る。

現在まで、この作品は植民地に住む外国人の物語であり、女性の性の無知と世論が引き起こした悲劇だと解説されている。そのためか、張愛玲の他の作品に比べると、この作品についての研究は少ない。しかし、張愛玲がこの作品を通じて訴えたいのは、本当に性教育の重要性和世論の残酷さへの批判であろうか。私はそう思わない。この作品の鍵を握る人物はスージーの母親ミッチェル夫人である。彼女こそが悲劇を引き起こした存在である。彼女を中心とする家庭の特異性がロジャー・アルバートを死に導くのである。張愛玲が重心を置きたかったのはその一家の家族関係にあると思う。ミッチェル一家の視点から考えると、この物語は女で構成された家庭が結婚によっていったん解体し、再び元の状態に戻ることを描いたものである。

「女家族」の中心人物は龍澤家の次女るい子である。物語はるい子の結婚話から始まる。るい子は同僚の大坪と恋をしているが、大坪は既に妻子を持っていて、るい子と結婚するのを拒絶する。母親の雪江はるい子に関とのお見合いを勧めるが、るい子はそれを断る。三女の秀子は代わりに関に会い、結婚することを決める。長女の時子は夫が戦死したため、娘を連れて実家に戻り、再婚することを望む。るい子は大坪と関係を断ったが、家を離れ、彼の子供を生んで、自分で育てる決心をする。こうして、龍澤家は解体する。

この作品は女性しかいない龍澤家の解体の過程を描いている。その解体のきっかけは不倫と結婚である。つまり男性の介入は女性たちのお互いへの不信、嫉妬、憎悪などを表面化させ、女性家族に終わりをもたらす。

3. 母親と娘の関係

二つの作品の母親像には一つの共通点がある。それは未亡人であることである。従って、彼女たちに直接干渉できる男性がいない。そのため、彼女たちは母親としての主体性を持つことが許されながら、妻、娘としての他者性を持っていない。二人の母親は、それぞれ家長としての権力を手にし、娘たちと違う関係を結ぶ。二人の母親が家長となったのは父親の不在（死亡）を前提にしている。男性が全て消えたことで、女性は家の支配権を手に入れるのである。そしてどちらもが女性だけの家庭である。即ち、二つの家庭は男性に支配されない女性の楽園になる条件が揃っている。しかし娘たちの結婚をきっかけに、家族の解体が始まる。

3.1 「沈香屑 —— 第二炉香」のミッチェル夫人と娘たちとの関係

「沈香屑 —— 第二炉香」の家族構成は次のとおりである。

ミッチェル夫人（夫と死別）、長女ミリセント（一度結婚したが、一夜にして別れて実家に戻る）、次女スージー（ロジャー・アルバートと結婚）、三女キャサリン（凱絲玲）。

ミッチェル夫人は一人で娘三人を育て、厳しく教育してきた未亡人である。また、作品に具体的に書かれてはいないが、彼女はある程度の経済力を持っていて、誰かに頼って生活する必要がない。夫の死によって家庭内の支配権を取った女性は子供に対して父親の代理人になるケースが多く、ミッチェル夫人の場合も一見そう見える。彼女は夫が死んでから父親と母親両方の役割を演じ、娘たちを管理する。娘たちが大きくなると、彼女は娘たちの結婚相手を物色する。娘たちの婚姻が破綻したら、今度は手を尽くして離婚させる。当時のイギリスでは離婚が極めて難しかったので、⁴ 娘の離婚を成立させた彼女は有能な人物だと認められる。娘たちは性に全く無知なために結婚生活に失敗した。そのことが彼女の教育の欠陥だと周囲は分かりながら、彼女を責める人はいない。娘たちの純潔を守るのは父権社会が母親に与えた義務と責任だからである。しかし有能とは言え、男性から見れば、彼女はただの未亡人である。彼女の存在価

値はよい妻となる娘を育てることにしかない。彼女は「母親」という立場しか持っていないので、娘が結婚すると、彼女の価値は全てなくなってしまう。しかしミッチェル夫人は父親の代理人の座にすわり、この運命に抵抗する。彼女は娘たちに対して異常な執着心があり、その執着心のために父権社会に求められた母親の役割を放棄するのである。

作家としての張愛玲は数多くの未亡人を描いた。林幸謙はこれを張愛玲の一つの特徴、つまり、「男性をテキストの外に排除し、女性家長に家を支配させる」ものと考えている。⁵ それらの母親像にふれて、胡錦媛は「父親のいない国では、母親が凶悪な統治者であり、『母と息子との心の絆』や『一心同体の母娘』などという温かさは全て水の泡で、遠くて手の届かない神話にすぎない」と論じている。⁶ しかし、ミッチェル夫人は凶悪な母親ではない。ミッチェル夫人は夫の死後、家庭内に自分の王国を造り、自分と娘たちを守ろうとする。林幸謙はその家を「女性の原始地域あるいは女性空間」と呼んでいる。⁷ 彼女は代理人の仮面を被って、娘たちをその女性空間に閉じこめる。彼女が使う方法は性の管理である。言い換えると、娘の処女性を完璧にすることである。娘たちが結婚する日まで性について全く無知な状態を維持するために、ミッチェル夫人は新聞までチェックする。⁸ その結果、娘たちは男性と隔離され、性について無知となる。

ミッチェル夫人は亡くなった夫の代わりに娘たちを育て、それから彼女たちを男性に渡すという未亡人に賦与された役目を果たすつもりはない。ミッチェル夫人の従順な未亡人という偽装はスージーの結婚式当日から語り手によって暴露され始める。娘の結婚の際、つまり娘を男に手渡す際、父親の代理人という仮面は彼女の娘を手放したくないという本心を隠せなくなる。語り手は、男性で、被害者でもあるロジャーの目を借りてミッチェル夫人の執着を見つめる。

結婚当日の午前、ロジャーはスージーに会いに行く時、ミッチェル夫人とスージーが泣いていることをキャサリンに教えられる。彼はその様子を想像しながら以下のように考える。

泣いている！結婚当日に！もちろん、それは情理にはかなう。一人の娘が初めて家と母親を離れて……少し感傷の雰囲気があるのは適当で、またなくてはならない。でもそれも限度がある。こんなにみんなそろって悲しんでいるのは、行きすぎじゃないか。(p. 17)

ミッチェル夫人が娘を送り出す時の悲しみは、男性から見ると遥かに度を越えている。ロジャーの考えによれば、娘が男と結婚するのは当たり前のことなので、母は自分のものが男に奪われたように苦しむのは異常なこととなる。ミッチェル夫人の失態は彼女の本心を暴露する。

ロジャーは性に対するスージーの無知についてよく分かっている。ミッチェル夫人が彼女に何も教えていないから。スージーはロジャーと性的関係を持つことを考えたこともない。スージーは天使のように純潔で、完璧な処女性を持つ。新婚初夜、ロジャーから性的関係を求められたスージーは彼を性異常者だと判断して逃げ出す。それは母親ミッチェル夫人の予想通りである。彼女は長女ミリセントを同じ方法で取り戻したことがあった。

結婚当日、ミリセントは妹のことを心配して、ロジャーに自分と前夫のことを教える。それを聞いたロジャーもミリセントの夫が異常者だと信じる。彼はミリセントの婚姻への恐怖がスージーに影響したかどうかを心配する。ミッチェル夫人はスージーに自分のことをまったく教えなかった、とミリセントはロジャーに言う。もしミリセントの婚姻の失敗がミッチェル夫人の教育の失敗だとしたら、スージーが同じ失敗をするのを母親として避けるべきである。しかしミッチェル夫人はミリセントの身に起こったことを隠したまま、スージーを嫁に出す。そして同じ悲劇が起こる。スージーは姉と同じく夫を異常者だと誤解し、夫を窮地に追い込む。三人の子供を生んだ母親として、ミッチェル夫人は男女の性について分かっている。また、何も知らない娘たちが新婚初夜に恐怖を感じることも分かっているに違いない。特にスージーの場合、ミッチェル夫人は何が起こるか予知しているはずであった。もし本当に娘の結婚を祝福するなら、こういう無知によって引き起こされる悲劇を防ぐべきである。しかしミッチェル夫人は黙っているだけでなく、ミリセントがスージーに教えることも許さなかった。理由は一つしかない。それは彼女が娘の結婚を祝福していないからである。ミッチェル夫人はロジャーを二回祝福する。一回目は結婚式当日、二回目は翌日の夜。その二回目の時、実家に逃げたスージーを迎えに行ったロジャーはミッチェル夫人の祝福に不吉な予感がし、彼女の敵意を薄々感じた。

昨日の昼、結婚式の前にも、あたかも呪うように、彼女は彼らを祝福した……（後略）（p. 31）

さらに、ミッチェル夫人は戻ってきたスージーを連れて、友人たちやロジャーの同僚を訪ねる。そして、香港の中産階級に属するイギリス人のほとんどがロジャーが変態だということを信じる。それはミッチェル夫人の狙いである。真相を分かっている彼女は故意的に噂を流し、ロジャーに周りの好奇と悪意の視線を浴びさせる。ロジャーが社会的世論によって殺されたというのは結果にすぎず、実際には、ミッチェル夫人の娘に対する性の管理とロジャーに使った手段がロジャーを死に導いたのである。

ミリセントとスージーは性に関する無知によって夫を殺す。彼女たちは自分の愛している夫が変態だと思い、一生苦しむ。ミッチェル夫人はこうした方法で娘たちを支配し、自分から離れさせないようにして成功し、女だけの王国を守る。娘たちは母親を疑ったことは一度もない。母娘の連帯感や男性への不信と恐怖によって維持され、また強化される。結婚という制度に対抗するために、彼女は娘たちを性に対する知識と理解のない「天使」に育て、その処女性で男性を殺すのである。ミッチェル夫人は男性殺しのために男性から得た権利を巧みに利用する。真相を知らない娘たちは婚姻に恐怖を覚え、母親を唯一信頼できる存在だと考える。それがミッチェル夫人の真の目的である。彼女が呪っているのは娘ではなく、娘を奪う男性である。彼女の娘への強い愛と執着心は、娘と男性との関係を壊してしまう。ミッチェル夫人は男性を自分の王国から消し、娘と「一心同体」の関係を結ぶのである。しかし、その関係は欺瞞を前提として、歪められた形で実現されたものであり、真の一心同体ではない。スージーはロジャーを愛しながら、彼の「異常」に苦しめられる。彼女は精神的に不安定になったミリセント⁹と同じく、一生男性への恐怖と孤独から解放されないだろう。ミッチェル夫人が娘たちに「一心同体」を強要することは、娘たちを不幸にした。

3.2 「女家族」の雪江と娘たちとの関係

「女家族」の家族構成は「沈香屑 —— 第二炉香」とかなり似ている。母親雪江（夫と死別）、長女時子（夫と死別して娘とともに実家に戻る）、次女るい子（大坪と不倫関係に落ちたが、後に別れる）、三女秀子（るい子のお見合い相手、関と結婚）。夫と息子を亡くした雪江は娘たちと共に生活する。雪江が良妻賢母であることは娘たちにも認められている。

七年前に、父を失った母は、それからは、文字通り、子供達の母であつた。母は、父以外には、誰にも愛情を持つた事がないのだらうかと、るい子は、そんな事を考へてゐる。(p. 472)

しかし母親と娘たちの間は決して穏やかではない。雪江にはミッチェル夫人のように女性空間を作る意図はない。彼女は父親の代理人としての役割を果たそうとしている。雪江は亡くなった夫の代わりに娘たちを支配し、自分の望む通りに娘たちを結婚させたいと考えている。性格の全く違う娘たちは母親を憎んでいる。女の家長を持つこの家庭は娘たちにとってけっして女の樂園ではない。長女の時子は夫を亡くして、一人娘を連れて実家に戻ったので、再婚するのは難しい。次女のるい子は自己主張が強く、母親に反抗している。彼女は大坪と不倫関係に落ち、母親が選んだ結婚相手に会うことを拒絶する。雪江はるい子を早く結婚させ、家から出したいと考えている。三女秀子は大人しい性格で雪江に女らしいと褒められ、可愛がられる。雪江は元々入り婿を招いて、自分に服従する秀子を家に留めるつもりであつた。しかし三人の娘は母親の家で生活することを苦痛に感じている。

母親と娘たちの平和に見える関係は、るい子の結婚問題によって隠された矛盾が暴露される。雪江は父権の忠実な崇拝者である。それは彼女が女性を無力で、頼りない存在だと考えているからである。雪江は夫を亡くしてから虚無感を抱いて、男のいない家を寂しく思い、「女の行く末といふものは、案外つまらないものだ」(p. 490)と思う。また、娘たち三人とも利己主義だと不満を感じる。彼女が遺憾に思うのは息子がいないことである。「自分をも含めて、すべて女といふものは、頼りのないものに生まれあはせてゐるかも知れない」(p. 490)。

雪江は結婚が女性に幸せを与えられるとは信じていない。良妻だつた彼女は自分の結婚生活を振り返ると、女中のような生活を送つたと思う。娘たちが結婚すれば、自分と同じ運命となることも彼女には分かっている。しかしそれでも雪江は娘たちを結婚させる。

三人の娘が、あと、十年も年をとれば、結婚をして、他人の家で暮す生活が、女中奉公をしたやうなものと、思ひ當るに違ひない。それでも、此の世の中のしきたりで、あまり年をとらないうちに、女といふものは、結婚といふ美名を頭にいたゞく、女中奉公にやらなければ、人々の口がうるさいのだ。(p. 490)

雪江は結婚という制度に反抗できない。結婚して苦勞するのはつらいが、それが無力な女性の唯一の道だと彼女は考えるからである。水田宗子は「結婚制度の外で生きることは、女にとって、経済的、社会的、精神的な不安定を意味する」と論じている。¹⁰ 雪江は世間に逆らう勇気もなく、結婚生活の中で感じた自分自身の苦しみと不満を、娘たちに言わずに、彼女たちを結婚させる。

雪江が娘たちを結婚させるもう一つの理由は、親としての責任感である。この責任は負担ともなる。特にるい子の場合はそのようである。雪江は自分が頼ることのできない娘を負担と見なす。

（前略）雪江は時子の時ほど、るい子の結婚には、あまり氣乗りはしなかったのだが、少々もてあまし氣味のるい子が、このさきざき、間違ひのおこらぬうちに、早くかたづいてくれるのは、親の身にとって、責任の軽くなる事でもあった。（p. 490）

家長である雪江は女性だけの家庭に少しも喜びを感じていない。娘たちも同じである。

長女の時子は再婚を望んでいる。彼女がるい子に嫉妬し、また憎むのも、自分と結婚してくれる男性を見つけられない焦りからである。秀子の結婚が決まり、るい子が大坪の子を産むために家を出ると言い出すと、時子は怒り出す。

私だけが、お母さんのめんだうをみる事になるの？（中略）私がお母さんと、この家をみてゆく事になるわね？（p. 522）

時子は母親と家に残されるのを恐れる。結婚を望む彼女は女性だけの生活に耐えられない。

一方、るい子は母に対して最も反抗心の強い娘である。彼女は結婚相手の選択に関しては母に干渉させないし、家を出る意志をはっきりと表す。るい子は大坪と関係を持った当初から、彼が結婚してくれれば、自分はいつでも家や家族を捨てるつもりである。

家のなかにも、社會にも、何一つ自分を救ってくれるものはない……。もつと、強引に、何かを掴みたかつたのだ。（p. 507）

るい子は男性の愛と婚姻に希望を託し、母親と家から得られない救いを求める。

秀子は母親だけではなく、亡くなった父親にも最も可愛がられていた。彼女が
るい子の軽視する関に好意を抱くのも父親と関係がある。

庭もない、狭い家のなかに、女ばかりで暮らしてゐる秀子には、父に一番
可愛がられてみただけに、秀子は、そのまだ見ぬ男に對して、父性愛のや
うなものを感じてゐた。(p. 478)

秀子は失った父親の面影を求め、父親のいない家に未練がない。関との関係
において、秀子は始終受身の立場にいる。関は彼女の事を調べ、彼女を選ぶ。
それに対して、秀子は喜びを感じる。秀子は関に呼ばれて、会いに行く時、次
のように考える。

ほつとした。重い、暗い、吾家。秀子は、ふつと、そんな氣がして、道を
歩きながら、三月の春めいた空に、しみじみと、深呼吸をしてみた。甘い
空氣である。(pp. 509-510)

「重い、暗い」は大人しいと褒められる秀子の母親が支配している家に対す
る評価である。彼女は母親から解放される日を待っている。救ってくれる人は
男性しかいない。関の一方的な調査に対しても、秀子は怒りを感じない。彼女
は母親の支配より関の法を喜んで受け入れる。しかし秀子は結婚に関して、不
安も感じている。彼女は結婚によって女が幸福になれるかどうかについては自
信がない。それでも彼女は結婚を女の逃げ場であり、唯一の道だと認識する。
こういう考えは林芙美子の作品によく出てくる。川本三郎はこの点について、
「結婚の中にとりあえず女性の幸福を求めなければならなかった」と論じてい
る。¹¹

4. 終わりに

張愛玲と林芙美子は同じく女性だけの家を描いたが、違う母娘関係を示して
いる。それは二人の作家の女性観に由来する。二人の作家はいずれも父権社会
における女性の弱さを認めるが、違う考えを持っている。二人とも女性の視点
から作品を書いてはいるが、林芙美子は男性依存を女性の天性に帰し、父権社
会の合理性を唱える。言い換えると、林芙美子は男性の優位を絶対視する。そ
の考えは作品の初めからはっきりと現れ、¹² 語り手が持つ女性への悲嘆と感傷
も反映しながらも、作品の基調を決め、女性の弱さを口実に男性の支配を合理

化する。その反対に、張愛玲は父権社会の女性支配を批判し、その体制が男性自身まで破壊することを鋭く指摘する。その考えの違いによって、張愛玲と林芙美子の母娘関係への認識ははっきりと異なる。

母親が支配する男性のいない家について、張愛玲と林芙美子ともその不安定性を指摘している。その原因は、家の支配権が父親の死によって母親の手に自然にもたされたもので、母親が父親から強引に奪ったものではない。母親は父親の代理人としてしか支配権を認められない。娘の結婚をきっかけに、母親は娘に対する支配権を娘の夫（男性）に譲らなければならない。

ミッチェル夫人と雪江との根本的な違いは男性の支配権を認めるかどうかにある。ミッチェル夫人は男性の支配権を否定し、女性の王国を維持しようとする。それが原因で、彼女は自分の王国を破壊する男性を憎み、結婚という制度に反対する。一方、雪江も結婚の擁護者ではないが、父権への畏敬で反抗を放棄する。彼女は娘たちが女であることで不信と憎悪を感じる。女は無力で、頼りない存在だという考えは、雪江の娘への態度を決める。自身への軽視と否定、男性優位への絶対視は母娘の連帯感を破壊する。

ミッチェル夫人の家は雪江の家と同じく女性の楽園ではない。母娘の緊密関係は欺瞞の上に成り立つ。娘の主体性を奪い、連帯感を強要する母は父権秩序を破壊すると同時に、女性自身をも破壊する。ミリセントの不安定な精神状態はスージーの運命を暗示している。一方、雪江の娘たちが母に反抗するのは、母が父権制の代理人であるためではなく、母が自分と同じ女性だという身分への軽蔑と不信のためである。それで、彼女たちは成長する為に母親を拒否し、乗り越えて行って、象徴的な形で「母親殺し」をする。

二つの家は男性が消えているとはいえ、父権制の枠組から抜け出せない。違いはその男性支配に対して、憎悪と恐怖を感じるか、それとも期待し歓迎するかである。しかし結果として、どちらも母娘の信頼関係を壊し、家の壊滅を招く。女性自身への認識が違うにせよ、張愛玲と林芙美子は両方とも、母娘の真の一心同体が実現不可能と言う結論を出していると思われる。

注

- 1 初出は 1943 年 6 月『紫羅蘭』月刊、本稿で使うテキストは『張愛玲文集』第一巻（1991 安徽文芸出版社）所収。
- 2 初出は 1951 年 1 月～8 月『婦人公論』、本稿で使うテキストは『林芙美子全集』第

- 九卷（1977 文泉堂出版）所収。
- 3 近代女性文学のテーマについては、水田宗子など編集『母と娘のフェミニズム：近代家族を超えて』（1996 田畑書店）の序に基づく。p. 11 を参照。
 - 4 『張愛玲文集』第一巻 p. 39 を参照。
 - 5 林幸謙 1998「反父権体制的祭典 —— 張愛玲小説論」子通、亦清主編『張愛玲評説 60 年』中国華僑 2001 年 p. 333
 - 6 胡錦媛 1999「母親，妳在何方？——被虐狂、女性主体與閱讀」『閱讀張愛玲 —— 張愛玲國際研討會論文集』楊澤主編 麦田出版社 1999 年 p. 236
 - 7 林幸謙 1998「双重意義的女性文本：張愛玲的女性主体論述」『中国現代文学研究叢刊』1998 年第 2 期作家出版社 pp. 180-181
 - 8 『張愛玲文集』第一巻 p. 20 を参照。
 - 9 『張愛玲文集』第一巻 p. 32 を参照。
 - 10 水田宗子 1995「放浪する女の異郷への夢と転落 —— 林芙美子『浮雲』」岩淵宏子など編『フェミニズムへの招待：近代女性文学を読む』學藝書林 1995 年 p. 309
 - 11 川本三郎 1999「林芙美子と昭和第 11 回東京に出たけれど —— 都市と農村の対立」『大航海』（26）新書館 1999 年 p. 158
 - 12 「女家族」は夏目漱石の言葉「女の二十四は、男の三十にあたる」（p. 471）の引用から始まる。そして、「具象の籠の中に飼はれて、個體の粟をついばんでは、嬉しげに羽搏するものは女である。いったい、女は子供の頃からおませなものだが、どの位の年齢で、女が、男に追ひかけなくなつてゆくものであらうか……」（p. 471）と、語り手の考えを述べる。